

ごあいさつ

青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会

会長 嶋田博信

今年は、画家・青木繁が房州布良を訪問し、《海の幸》を描いてから 110 年目にあたります。その節目に念願がかない、青木繁《海の幸》誕生の家・小谷家住宅（館山市指定文化財）の修復工事が始まることになりました。小さな漁村のまちづくり活動として 10 年の取り組みになりますが、この間、多くの皆様にご支援をいただいていたことを心より御礼申し上げます。

まず、小谷家のご家族におかれましては、私有財産にもかかわらず「地域活性化と日本の美術振興に寄与できるなら、古い我が家をどうぞ使ってください」というご英断をしてくださいました。これから2年間の修復工事が終われば、平成 28 年春に築 120 年の母屋がよみがえって一般公開に供することになります。ご家族の住居は物置を増改築した小さな建物に移っていただき、たいへんご不便をおかけいたします。改めて感謝と敬意を表するとともに、市民の皆様にも深くご理解いただきますようお願い申し上げます。

また、平成 22 年に発足したNPO法人青木繁「海の幸」会におかれましては、大村智理事長様をはじめ全国の著名な画家や美術関係の皆様が、小谷家住宅の修復基金のために力を尽くしてくださっています。東日本大震災で寄付が困難になりましたが、全国巡回で青木繁「海の幸」オマージュ展を開催し、売上の一部はチャリティ基金と納めてくださっています。オマージュとは尊敬を意味するフランス語ですが、青木繁《海の幸》誕生の聖地として小谷家住宅を後世にのこしたいと思ってくださることは、館山市民として本当に有難いことと感謝しております。3年目となる平成 26 年のオマージュ展は、銀座・京都・福岡・田園調布と並んで、たてやま渚の博物館と館山市コミュニティセンターを会場に館山展が開かれます。ご高名な先生方の作品が一堂に会するばかりでなく、伝統ある館山美術会の皆様が協賛される素晴らしい機会として、多くの皆様にご鑑賞いただけることを嬉しく思っています。

当会では、平成 23 年より文化庁の「文化遺産を活かした地域活性化」事業として、ヘリテージまちづくり講座などを開催しています。その一環として開催する「青木繁《海の幸》フォーラム」では、石橋美術館の森山秀子学芸課長をお招きし、「青木繁を通してみる文学と美術の交流」の美術講座を伺うことができました。後半の座談会では、小谷家当主の小谷福哲さん、「海の幸」会理事で女子美術大学の吉武研司教授、『海の幸』を複製した労働大臣認定カラーキャナー一級技能士の島田吉廣さん、当会事務局長であるNPO法人安房文化遺産フォーラム代表の愛沢伸雄さん、同じく池田恵美子さんらが登壇し、「明治の漁村・富崎から《海の幸》誕生を探る」というテーマで楽しい座談会となりました。

小谷家住宅の保存事業はまだ道半ばですが、館山市ふるさと納税（非課税となる寄付制度）や名画の購入を通じて、引き続きご支援を呼びかけているところです。日本を代表する青木繁《海の幸》の力を借りて館山の地域ブランドに磨きをかけて、子どもたちの未来に誇りを手渡せるよう、末永くお力添えいただけますよう重ねてお願い申し上げます。

平成 26 年 7 月

『海の幸・刻画』への想い

館山美術会 顧問 船田正廣

信州上田生まれの私は、人生の半分以上を房州館山で美術の教鞭をとってきました。私にとって大学の大先輩である青木繁が、東京美術学校(現東京芸術大学)を卒業した明治 37 年夏、布良という海岸で名画『海の幸』を描いたということは知っていましたが、その漁村こそ私の住む館山市内だということは、随分長い間気がつきませんでした。近代西洋画としてわが国第一号の重要文化財となった『海の幸』は、私のみならず多くの美術家に影響を与えてきたといっても過言ではありません。

素っ裸で隊列を組んで、大きなサメを担いで砂浜を行進するということは、実際に布良の漁師がしていたとは考えにくいことです。美術学校で、人体美学や美術解剖学を学んだばかりの青年青木繁が、布良の漁師たちの労働する姿や、航海安全豊漁祈願の祭礼で荒々しく担ぎゆかれる神輿を見て感動し、人間として平等に躍動する肉体美に憧憬を抱いたのではないのでしょうか。この衝撃的な体験と、学校での机上の学問を融合していったとも思われます。男たちの歩く先には大きな夢が満ちているし、目指す先は永遠にあるという確信に満ちた大ロマンを感じます。

還暦を迎え、千葉県立高校を退職し私立安房西高校の非常勤講師となったとき、私はあらためて『海の幸』とじっくり向き合う時間をもつことができました。私は彫刻家として、彼とはちがうが、彼と同等の衝撃的体験を共有することは出来ないだろうか…と思いました。

そして感じたことは、青木繁は彫刻家以上に彫刻的な絵を描ける画家であるという結論でした。それなら、この絵から必ず彫刻が生まれるはずだと確信しました。なるべく絵画『海の幸』に近い形で、原画と同寸大で彼の感動に迫ってみようと思い、粘土によるレリーフ(浮き彫り)に取りかかったのです。

1、2年は制作に行き詰まりました。その度に、彼の描いた骨組みや筋肉表現にたどりつけず、頭の下がる思いをしました。3年目に入ったある日、もういくら頑張っても、自分の才能ではこれ以上のものは出来ないと感じ、彫塑のヘラを置きました。完成作品の写真を撮影し、右下の日付を見たとき、私は身震いがしました。そこには、2004.7.31 と写し込まれていたのです。青木繁が布良の小谷家に滞在し、『海の幸』を描いた 1904 年夏から、ちょうど百年目の夏だったのです。こうして、私の『海の幸・刻画』は誕生しました。その後、この感動を分かち合ってください安房西高校の理事長によりブロンズが鑄造されることとなり、同校に展示していただいています。

同じころ、青木繁『海の幸』誕生の家と記念碑を保存する会が発足し、私も活動に参加してきました。さらに、全国の著名な先生方がNPO法人青木繁「海の幸」を設立されたことに感動し、そちらにも入会させていただきました。『海の幸』誕生から 110 年目にあたる 2014 年夏の青木繁「海の幸」オマージュ展では、光栄なことに館山美術会へもお誘いがあり、21 名が出品できることになりました。設立 93 年を迎える館山美術会にとって、こんなにうれしいことはありません。

2年後の 2016 年春には、青木繁『海の幸』誕生の家として小谷家がよみがえり、本当の意味で館山は「美術界の聖地」となります。私のふるさと上田と同じように、芸術家が集うまちづくりの未来を想像し、毎日わくわくしています。